田嶋智太郎の FX レポート☆彡　　２０２３年１２月１４日更新分

■　今回のドル／円のリバウンド余地は自ずと限られる…

唖然としてしまうほど「ハト派寄りのサプライズ」であった。

むろん、今回の米連邦公開市場委員会（ＦＯＭＣ）のことである。前回更新分の本欄で触れた複数の米連邦準備理事会（ＦＲＢ）関係者らによる“火消し（市場に広まるハト派寄りの見方の打ち消し）”発言は一体、何だったのだろうと思わずにはいられない。

結局のところ、やや勘違いしていた部分も含めて、市場における来年の米利下げ観測にあまり間違いはなかったということになり、筆者は前回「こうした（目先的なリバウンドの）展開が見られた場面では、やはり基本的に戻り売りスタンスで臨みたい」と述べておいて良かったと、ほっと胸を撫で下ろしている。

この一週間で言うと、まず先週８日のドル／円の急落があった。件（くだん）の植田日銀総裁による「チャレンジング」発言が引き金となった。この言葉の解釈についても、市場でかなりの勘違いがあったものと思われるが、もともと当局が最も警戒していた「為替レートのボラティリティーの上昇を招くリスク」を自ら犯してしまう結果になったことからすれば、甚だ不用意な総裁発言であったというべきであろう。

もちろん、この場面では事前に投機筋による円ショートがかなりのボリュームで積み上がったままの状態になっていたことから、その積み上がったポジションが一気に解消されたことに加え、数多くのストップロスが巻き込まれたことと、少なからぬＦＸ投資家が相次いで「ロスカット発動」の憂き目にあったことも一時的な下げを必要以上に大きくしたと考えられる。

つまり、物理的に一時下げ過ぎた部分もあったわけで、後に当然のごとく大きく値を戻す場面があった。具体的には、先週７日に一時１４２円割れの水準まで下押したドル／円が、１１日には１４６．６０円処まで一旦値を戻すこととなった（左図参照）。

こうした場合でも、短期的なリバウンドの流れに乗ろうとするより、やはり戻り売りのタイミングをうかがうのが得策と言える。ちなみに、このリバウンドが一巡するのと同じタイミングで、２１日移動平均線が８９日移動平均線を上から下に抜けるデッド・クロスが示現し、戻り一巡感が広がる場面ではあった。

ただ、今回のＦＯＭＣに対して市場では事前に「期待するような積極的な利下げは予想してこない」と見る向きが多かった（だから、サプライズだった）。つまり、ＦＯＭＣ通貨後に一時的にもドル／円が多少強含みとなる可能性もあると見られていたわけで、戻り売りを仕掛けるのは「ＦＯＭＣ後の動きを待ってからの方が良い」と考える向きもあったものと推察される。実際、筆者も今回はショートを仕掛けるタイミングを逃してしまった。

さて、ここで再び１４２円近辺まで下押してきたドル／円だが、今回は前回（７日以降）のようなやや大きめのリバウンドには期待しにくいだろう。前回は需給の面から物理的に下げ過ぎたところもあったが、今回は事情が異なる。今回、ＦＯＭＣ参加メンバーらによる金利予想は「２４年に３回の利下げ」であったが、少々調子に乗り気味の市場は「よりドラスティックな利下げ」を織り込みに行っている。足元は、１月安値から１１月高値までの上昇に対する３８．２％押しの水準で下げ渋る格好となっているが、同水準を明確に下抜けると次に「半値押し」の水準である１４０円処を中期的に試しに行くと個人的には見ておく。　　１２月１４日　０９：５５